

放送大学博物館の可能性と意義：展示会開催の蓄積および 博物館設立に向けた調査を通じて

稲村 哲也¹⁾

The Possibility and Significance of University Museum : Based on Exhibition Experience and Research for the Museum's Establishment

Tetsuya INAMURA

要 旨

筆者は、アンデス文明の展示会を企画し、これまでに、秋田、福島、神奈川、鹿児島、大分で、各学習センターのご協力を得て開催した。それらの展示会では、その準備と運営に各学習センター所属の学生さんたちがボランティアとして大活躍し、期間中に積極的に放送大学の広報にも尽くしてくれた。これらの活動の過程で、筆者は放送大学と博物館の連携に大きな可能性を見出した。また、学内に展示スペースがあることを知り、2017年度末の評議会で、放送大学博物館設立と、学芸員資格の授与のための博物館実習の設置を提案し、賛同を得た。2018年度に大学執行部での議論で博物館設置の方向性が示され、2019年度、学習教育戦略研究所の企画として「放送大学博物館構想・博物館実習構想のための基礎的研究」を実施した。その結果、学内に、古い放送機材や実験機材などの資源があることが判明した。そして、既存施設を活用することにより、費用をかけずに設立することが可能であり、大学の教育と発展のための効果が極めて大きいことも明らかとなった。

ABSTRACT

The author planned and held exhibitions on the Andean Civilization in five prefectures—Akita, Fukushima, Kanagawa, Kagoshima, and Oita—with cooperation from the Study Center in each place. Students participated in preparing and supporting the exhibitions' management—they interacted with the visitors, and significantly contributed to the university's public relations. Through the experience of the exhibitions, the author found out that cooperation between the university and museums held a lot of potential to facilitate the former's development. Thus, the author proposed the establishment of a museum in our university as well as the museum curatorship training course, in 2017. The executives were in general agreement on the plan in 2018, and the author carried out basic research in 2019 for the museum's establishment, finding out the resources required, such as space for exhibition, old equipment for broadcast and laboratory instruments, among other things. Utilizing the available resources, the museum can be established without incurring any cost, and subsequently, its tremendous impact on education and university development can be expected.

1 はじめに

筆者は、2014年度に特別講義「古代アンデス文明と日本人」を制作し2015年度から放映された。その内容は、古代アンデス文明のユニークな特徴、その研究を進めてきた東京大学アンデス調査団の足跡とその成果、日本人によるアンデス研究の始まりとなった2人

の日本人移住者（秋田出身の天野芳太郎と福島出身の野内与吉）の「マチュピチュでの出会い」、などであった。

これらのテーマは学術的に意義深いだけでなく、人々の感動を呼ぶ物語である。そこで筆者は、特別講義と共に、その展示会を企画し、東大アンデス調査団、ペルーの天野博物館（現天野プレコロンビアン織物博物館）、BIZEN中南米美術館（岡山県備前市）、野外

¹⁾ 放送大学特任教授（「人間と文化」コース）

民族博物館リトルワールド（愛知県犬山市）などの協力を得て、開催することができた。結局、2015年度から2018年度の間に、「古代アンデス文明と日本人」をテーマに、アウトリーチ活動として、秋田、福島、神奈川、鹿児島、大分の各県で、当地の学習センターと共同で展示会を開催してきた。

展示会の開催は、地域のメディアで取り上げられる大きな機会となり、広報に係るメリットが大きい。展示そのものと共に、期間中に何度も開催できる講演会、シンポジウム、音楽会、ギャラリー・トークなど、報道のネタを提供できるからである。さらに、展示会に係る学生さんたちによる草の根的広報の効果も重要である。各地の展示会の開催では、「マチュピチュ巨大写真」と「ペルー民族衣装の無料貸し出し」による「記念写真コーナー」を設けたり、「民芸品販売コーナー」を設けた。そこが各学習センターの学生さんたちの活躍（民族衣装試着の手伝いや販売）の場となった。そして、学生さんたちが展示期間中に多くの来館者と交流し、放送大学での学習の楽しさなどを話すことで、結果的に効果的な広報への貢献につながった。なお、民芸品販売は、展示にご協力いただいた博物館等への還元を目的とした。

展示会開催の実践の積み重ねは、放送大学が展示会を開催することのメリット、さらに、「放送大学博物館」（仮）設立の実現性とメリットについて確信する機会となった。

一方、放送大学では学芸員資格のための必修科目（実習を除く全8科目）を開講しているが、すでに多くの学生が8科目の履修を終えていながら、博物館実習を受講できないために学芸員資格を取得できない状況が続いている（実習を受けられる協定校があるが、需要をまったく満たしていない）。「放送大学博物館」設立は、実習科目開設を可能とし、放送大学が自前で学芸員資格を授与する道を開く。

筆者はさらに、放送大学が全国に5000以上ある各地の博物館との連携を構築することによるメリットを確信するに至った。そのひとつは、博物館のロケなどによる放送大学の授業内容の充実である。博物館関連科目はもちろんのことであるが、他の教養科目においても、博物館活用の意義は大きい。その考え方に基づき、2019年にオンライン科目「博物館で学ぶ文化人類学の基礎」を制作したが、2020年度の学生登録者は1500名を超え、学生のニーズの高さが明らかとなった。連携のメリットのもうひとつは、学生募集に係るものである。近年、博物館は地域との連携を重視して

おり、「友の会」組織も充実してきた。博物館ファンの集まりである「友の会」会員は、「教養」を提供する放送大学との親和性が高く、広報のターゲットとして極めて有効であろう。

筆者は、「放送大学博物館」設立の可能性とメリットへの確信から、その実現に向けた活動を実施してきた。まず、2017年度の評議委員会で、学芸員資格授与と放送大学博物館（仮）設立を提案し、來生学長はじめ、評議員から前向きな評価を得た。続く2018年度に、執行部で本件が議論され、その準備を進めることが基本的に了承された。それを踏まえ、2019年度の学習教育戦略研究所の課題研究「放送大学博物館構想・『博物館実習』構想のための基礎的研究」を実施し、まず、学内に点在している放送関連機材、理系の実験機材など、博物館の収蔵資料となりうるモノの確認・リスト作成、博物館のコンセプト・基本設計等を進めてきた。その結果、学内には「大学博物館」の収蔵・展示にふさわしい多くの資料が散在していることが明らかとなった。さらに、既存の施設（プライム室）を活用することにより、設置の経費をほとんどかけずに設立することも可能であることがわかった。

以上の活動の結果、「放送大学博物館」構想は、実現性が高く、教育上も経営上もメリットが大きいこと、また、経費がかからず、費用対効果が極めて高いことが明らかになってきた²⁾。そこで本稿では、筆者がこれまで実施してきた放送大学主催の展示会のアウトリーチ活動の内容を報告し、また学芸員資格授与に必要な「博物館実習」の場としての博物館の設立構想と、その準備段階として実施した「基礎的研究」の成果を報告し、放送大学博物館（仮）設立の可能性と意義について論じたい。また、博物館との連携が放送大学の活性化・発展に資する効果についても論じたい。

2 展示会「古代アンデス文明と日本人」の開催

2-1 これまでの展示会開催の経緯と概要

特別講義の「古代アンデス文明と日本人」をテーマとする展示会開催の皮切りは、2015年1月24日から6月21日まで、東京大学総合研究博物館分館インターメディアテック（東京駅前JPタワー2階）で開催した特別展示「黄金郷を彷徨う—アンデス考古学の半世紀」であった。この展示会は、特別講義の出演者である大貫良夫東京大学名誉教授（元東大アンデス調査団団長）と筆者が協力し、アンデス調査団のメンバーでも

²⁾ この主張の根拠は、筆者の経歴と経験にも立脚している。筆者は、野外民族博物館リトルワールド（愛知県犬山市）のオープン（1983年）の2年前から6年半にわたり同博物館に研究員として勤務し、博物館の設立（展示業者と連携した展示の企画・基本設計・現場指揮など）と運営（企画展開催、イベント開催など）に携わった。その後、愛知県立大学教養部に異動し文化人類学を講じたが、1998年のキャンパス移転と学部新設（文学部）に伴い、「学芸員資格授与」の立ち上げに携わり、その後の運営を主導してきた。具体的には、展示実習室を設計・新設し、学内実習を担当すると共に、館園実習を統括した。なお、「博物館実習」は「学内実習」と「館園実習」に分かれる。「館園実習」は学外での博物館・動植物園等での実習のことであり、「館園実習」の統括とは、事務スタッフと連携した、学生の実習先（県内や帰省先の博物館）とのマッチング、依頼、実施管理、単位授与までの一連の仕事である。

ある鶴見英成氏（東京大学助教・総合研究博物館所属）が中心となって、アンデス調査団の成果を中心として企画し、準備・運営したものである。この展示会は、多くの来館者を集め、好評を博したが、その内容については、特別講義「古代アンデス文明と日本人」のロケにぎりぎり間に合わせ、鶴見英成氏に会場で説明していただくという形で、特別講義の中で紹介することができた。これが、放送大学のTV番組と博物館の最初の連携であった。

この展示会の成功が後押しとなり、学長裁量経費1（プロジェクト支援）と中日映画社（株）など民間の協賛による資金的目途が立ち、2015年6月28日から7月20日まで、天野芳太郎の生誕地の秋田で「アンデスに魅せられた男天野芳太郎」展の開催が実現した。放送大学と秋田魁新報の共催で、会場は秋田魁新報社内の「さきがけホール」であった。この展示会は、筆者にとっては最初のアウトリーチ活動であり、展示ケースの確保から始まる会場設営、展示作業、運営に多くの苦労があった。しかし、秋田学習センター所長（当時）の井上浩先生のご尽力により、センター職員と学生ボランティアのみなさんの協力を得て、成功裏に実現することができた。

さらに翌2016年8月7日～28日に、野内与吉の孫にあたる野内セサル良郎氏の強い熱意に押される形で、福島県二本松市の市民交流センターにおいて、「マチュピチュ村創設者・野内与吉と古代アンデス文明展」を開催した。ここでも、設営・展示作業はたいへんだったが、放送大学福島学習センター所長（当時）の森田道夫先生をはじめ、センター職員、学生ボランティアのみなさんの多大な協力のおかげで、たいへんな盛り上がりを見せた。

秋田と福島での展示会の内容についてはすでに本誌の33、34号で報告している（稲村2016a、野内・稲村2017）。この二つの展示会の準備・運営において、最初の大きな課題は展示ケースの確保であったが、秋田では秋田県立博物館から、福島では福島県立博物館から無償で借用させていただいた。それらの経験は、放送大学の博物館との連携のメリットを予感させるものであった。

展示会はその後も、2017年度～2019年度に、神奈川（横浜市）、鹿児島（鹿児島市）、大分（宇佐市）で、各学習センターが中心となって実施した。そこで、次節以降では、展示会のテーマの概要に触れると共に、未報告の3地域での展示会の成果について報告し、アウトリーチ活動の意義、また、放送大学と博物館の連携の意義について論じたい。3地域での開催は、それぞれに特徴があったが、テーマと展示の内容については共通する部分が多い。そこで、神奈川では展示の概説的な内容、鹿児島については展示の準備の手順、大分については各コーナーの特徴および博物館との連携について述べたい。

2-2 展示会のテーマ：「マチュピチュでの出会い」とアンデス文明

展示会のテーマは、古代アンデス文明のユニークな特徴、その研究を進めてきた東京大学アンデス調査団の足跡と大きな成果、そして、そのきっかけとなった2人の日本人移住者（秋田出身の天野芳太郎と福島出身の野内与吉）の「マチュピチュでの出会い」、さらに、アンデス研究のきっかけとなった泉靖一（当時東京大学助教授）と天野芳太郎とのリマでの出会い、岡山県に博物館を開設した森下精一と天野芳太郎のリマでの出会いなどであった。

野内与吉は1895年福島県大玉村に生まれた。1917年、20名の福島県出身の契約移民の一人としてペルーに渡り、アシエンダ（大農園）での労働に従事した。その後、クスコ＝マチュピチュ間の鉄道建設に携わり、そのままマキナチャヨ集落（旧マチュピチュ村）に住みつき、ホテル業を始めるかたわら地域の環境整備に努め、住民の大きな信頼を得て初代村長になった（福中1940、野内・稲村（編）2016）。

野内与吉が日本を発って以来、故郷の家族との音信が途絶えていた。ところが、1958年、三笠宮殿下がブラジル移住50周年の式典に出席された帰路ペルーに寄り、マチュピチュを訪問した際に、与吉の長女オルガが殿下に花束を贈呈し、それが日本の新聞に報道された。それを見た日本の家族が与吉の消息を知り、大使館を通じて連絡をとり、旅費を送って帰国が実現した。野内与吉は52年ぶりにふるさとに帰国した。「日本に残れ」という実家の勧めを辞退し、ペルーに残した家族のために現地に戻ると、まもなく亡くなった。

一方、秋田出身の天野芳太郎は、横浜で起こした事業で資金を手になると、横浜港から海外雄飛を果たし、パナマを拠点に、中南米各地で漁業、農業、貿易などの事業を展開し、南米有数の実業家となった（天野1983、天野芳太郎生誕100周年記念誌編集委員会1998、尾塩1984）。1935年、ハイラム・ビンガムによる「マチュピチュ」の著書を読んで、（いてもたってもいられずに）ペルーのマチュピチュ遺跡を訪れた。そのとき、ふもとで宿を経営していた野内に会い、彼の案内で一週間に亘って現地調査を行った。これが、天野がアンデス文明に魅せられ、のめりこむきっかけとなった、野内との「マチュピチュの出会い」である。天野は、日米開戦とともにパナマで、スパイ容疑で拘束され、北米の強制収容所に6ヶ月間収容された後、捕虜交換船に本国送還となった。しかし天野は不屈の精神を発揮して戦後ふたたびペルーに渡り、事業（漁業）を再興した。そして、アンデス文明、とくに、それまで顧みられなかったペルー海岸地方のチャンカイ文化にほれ込み、その研究と遺物コレクションに身を投じ、1964年リマに天野博物館という考古学博物館を創設した。

戦前、朝鮮半島の京城大学に在籍していた泉靖一は、敗戦後博多に引き上げたのち、1951年東京大学助教授に就任した。1957年、日系人社会の調査のため

ラジルに赴いたその帰途、リマに寄って天野芳太郎に出会った。泉は、天野からペルーでの発掘調査を勧められ、1958年にはさっそく石田英一郎（当時東大教授）を団長、泉を副団長とする多分野の東大調査団がペルーを訪れた。1960年には、泉団長のもと東京大学アンデス考古学調査団が組織され、ペルー中部アンデス高地のワヌコで発掘が開始された。大貫良夫（当時大学院生）が参加したコトシュ遺跡での発掘が進むと、（当時はアンデス文明の始まりと考えられていた）チャビン期の神殿の下から「交差した手の神殿」（無土器時代、当時最古の神殿）が現れるという大発見があった。その後、大貫良夫が団長となり、調査団はクントゥル・ワシ遺跡発掘等でさらに大きな学術的成果をあげ、米大陸最古の黄金の冠・装身具の出土をきっかけに現地にクントゥル・ワシ博物館を設立した（大貫・加藤・関2010）。

天野がリマに「天野博物館」を設立した5年後の1969年、漁網会社を経営していた岡山県の森下精一がリマに天野を訪ねた（森下精一伝編纂委員会1980）。森下はもともと備前焼などに造詣が深かったが、天野に見せられたアンデスの土器や織物の魅力にとりつかれた。中南米の考古遺物のコレクションを始め、その6年後の1975年に、岡山県備前市日生に美術館（現在のBIZEN中南米美術館）を開設してしまった。こうして、野内与吉と天野芳太郎の出会いに始まる日本人のアンデスへの想いが、古代アンデス文明の発掘や博物館の開設として大きく花開いた。

2-3 横浜での開催

2016年に、当時神奈川学習センターの所長を務めておられた池田龍彦副学長の強力なサポートを得て、横浜みなと博物館の企画展示場で、放送大学と日本マチュピチュ協会の主催による「マチュピチュの出会いと古代アンデス文明」展を開催した（巻末カラー①）。この展示会は、天野芳太郎が中南米に雄飛する前に、横浜の馬車道で事業を展開していたこと、天野の父親が横浜港で事業を行っていたことなど、天野に縁の深い地であることが開催の契機となった。

展示会では、野内与吉のマチュピチュ鉄道関連等の遺品、天野芳太郎の著書や自筆の手紙などの遺品を展示するとともに、古代アンデス文明に関しては、BIZEN中南米美術館所蔵の土器、織物、ミイラ頭骨などの考古遺物、東大アンデス調査団による黄金装身品（レプリカ）などの考古遺物を展示した（写真1、2）。また、古代文明が現在のアンデスの先住民文化に継承されていることを示すため、野外民族博物館リトルワールド（館長大貫良夫）が所蔵する現在のアン

デスの伝統的な民具なども展示した。

横浜みなと博物館は横浜市立の博物館であるが、その企画展示室を会場とした。そこでの展示の設営にあたっては、公立ならではの厳しい制約もあり、その点では困難も伴った。しかし、神奈川学習センター所長（当時）の池田龍彦副学長、同センターの藤田事務長をはじめとするスタッフに全面的にご協力いただき、乗り切ることができた。運営には、野内セサル良郎氏が市内に宿泊して取り組み、彼の指揮の下、同センター所属の学生を中心とする20名以上のボランティアが、シフトを組んで、受付、会場案内、民族衣装試着、広報等に務めた。また、福島での展示会で活躍してくれた学生さんたちが準備や運営の応援に駆けつけてくれたのには感激した（写真3）。

この展示会の目玉のひとつは、巨大なマチュピチュ写真の展示とペルー民族衣装の無料貸し出しであった³⁾。それによって、来場者が衣装を身に着けて記念写真を撮ることができた。そのお世話が、ボランティアの重要な仕事の一つであった（写真4）。そのようなイベントは、展示会を見るだけのものではなく、参加や交流を促す場とすることを意図したものである。それによって、会期中、来場者とボランティアの間に



写真1 クントゥルワシ遺跡で発掘された黄金の冠



写真2 展示会場。奥にマチュピチュ巨大写真

³⁾ 2011年に野外民族博物館リトルワールドで、ハイラム・ビンガムによるマチュピチュの再発見から100周年を記念した、特別展「謎のアンデス文明5000年展～時空を超えたモノかたり～」が開催された。その展示のため、筆者が、京都のニューリー（株）の新技術「カメラ・スキャナー」を用いたマチュピチュ巨大写真の展示を企画し、実現した。大貫良夫氏（リトルワールド館長）、阿部直樹氏（リトルワールド所長：当時）、宮里孝生氏（リトルワールド主任学芸員）、藤本和則氏（ニューリー株式会社社員）とともに、現地へ赴き、現地考古学者の協力により、マチュピチュ遺跡の新技术による撮影を行った。放送大学主催の展示会で使用した巨大写真は、リトルワールドとニューリー（株）の協力により実費で印刷・制作したものである。



写真3 福島から応援に来ていただいた学生さん：根本芳則氏（左端）と五十嵐千加子さん（右から2人目）。池田龍彦副学長（右端）と野内セサル氏（左から2人目）との記念撮影。



写真6 左から、野内セサル氏、稲村、エラルド・エスカラ駐日ペルー大使ご一家、尾塩尚氏（天野芳太郎伝記記者）、森下矢須之氏（BIZEN中南米美術館館長）



写真4 民族衣装を着てマチュピチュ遺跡で記念撮影



写真5 学生ボランティアのみなさんとの打ち上げ

会話がはずみ、自然に放送大学の広報ができたのである（写真5）。

展示期間中、様々なイベントを催した。そのひとつは、パロミノ・ママニ・イルデフォンソ氏によるアンデス民族音楽フォルクローレの演奏である。展示会場内のマチュピチュ大写真の前で演奏していただき、展示場を「アンデス世界」を現出させる挑戦的な試みであった（巻末カラー②）。また、BIZEN中南米美術館の森下矢須之館長にギャラリー・トークや音楽イベントを実施していただいた。ギャラリー・トークでは、エクアドルの笛付き土偶（約3000年前）の笛の音の鑑賞が人気を博した（巻末カラー③）。屋外の帆船「日

本丸」の前で実施した音楽イベントでは、森下館長が「森下艦長」の扮装で登場し、BIZEN中南米美術館のマスコット・キャラクターの着ぐるみが美しい歌声を披露してくれた（巻末カラー④）。

期間中にペルー大使ご一家が来場し、展示とイベントを楽しんでいただいた（巻末カラー⑤）。そして大使はペルーとの国際交流への寄与への感謝を述べられた（写真6）。この展示会については、読売新聞社、朝日新聞社、神奈川新聞社に記事が掲載された。また、J・COM、FMヨコハマ等でも取りあげられた。入場者数は約2500人（有料は約2000人）で、来場者全員に放送大学のパンフレットを配布した。また、かなりの数の来場者が放送大学の募集要項を持ち帰った。このように、展示会開催は、開催期間を通じて、大きな広報の効果をもつと言える。

以下は展示会企画の概要である。

「マチュピチュの出会いと古代アンデス文明」展

【企画概要】日本人による古代アンデス文明研究には目覚ましいものがある。その源流が、1935年の2人の日本人の「マチュピチュでの出会い」にあることは、あまり知られていない。それは、マチュピチュ村の村長になった福島県出身の移民・野内与吉と、秋田県出身の実業家・天野芳太郎の出会いである。天野は、横浜の馬車道で「子育て饅頭」などの事業を興して成功したあと、中南米に渡り、パナマを拠点に中南米有数の実業家として活躍していたが、1935年、野内与吉に案内されてマチュピチュ遺跡を踏査した後、古代アンデス文明に魅了され、考古学と遺物のコレクションに身を投じ、1964年にペルー・リマ市に考古学博物館を開設した。この天野芳太郎の影響で、泉靖一を団長とする東京大学アンデス調査団が1960年にペルーで発掘を開始し、以後、輝かしい成果をあげてきた。また、岡山県の実業家・森下精一は、天野の影響で、中南米の古代文明に惚れ込み、発掘品のコレクションを行い、1975年備前市にBIZEN中南米美術館を開設する。こ

の展示会では、こうした日本人の先達の功績を紹介すると共に、その成果を中心に、古代アンデス文明の発掘品と現代に伝わる民具等を展示し、アンデスの魅力を紹介する。

- 【開催場所】 横浜みなと博物館
 【開催日】 2016年12月3日(土)～12月25日(日)
 【入場料】 大人600円(チラシ持参者の割引料金400円、高校生以下無料)
 【主催等】
 ・主催：放送大学、日本マチュピチュ協会
 ・共催：天野博物館友の会、BIZEN中南米美術館
 ・後援：在日ペルー共和国大使館、横浜市、神奈川新聞社、FMヨコハマ、横浜商工会議所、横浜青年会議所、神奈川県中小企業家同友会、横浜貿易協会
 ・協力：東京大学総合研究博物館、クントゥル・ワシ博物館、東京大学・埼玉大学アンデス調査団、横浜みなと博物館、帆船日本丸記念財団、野外民族博物館リトルワールド、(株)ニューリー、天野芳太郎顕彰会、日本書学館、中日映画社、(株)横浜岡田屋、(株)ワンウィル、中山商店

- 【展示内容】
 ・マチュピチュ巨大写真(3m×10m)
 ・野内与吉遺品(約20点)：マチュピチュ鉄道関連の工具等
 ・天野芳太郎遺品(約20点)：著書、自筆の手紙など
 ・古代アンデス古代文明出土品(約50点)：土器、織物、古代裂、ミイラ頭骨、金装身具レプリカ、交差した手レプリカ
 ・アンデスの現代の文化を表す民具等(約50点)
 ・その他

- 【イベント等】
 ・会場は全面的に写真撮影可
 ・民族衣装の貸し出し試着(無料)：マチュピチュの前での記念写真可
 ・講演：「野内与吉とその生涯」野内セサル良郎、「古代アンデス文明」大貫良夫、ほか
 ・音楽イベント：パロミノ「フォルクローレ」、ペッカーリーほか「野外音楽祭」

- 【実行委員会】
 大貫良夫(東大アンデス調査団元団長、東京大学名誉教授、リトルワールド館長)：顧問
 稲村哲也(放送大学教授)：代表
 野内セサル良郎(日本マチュピチュ協会会長)：共同代表
 楠田枝里子(司会者、エッセイスト)
 池田龍彦(放送大学神奈川学習センター所長)
 森下矢須之(BIZEN中南米美術館館長)
 尾塩尚(元映画プロデューサー、著述家)
 奥村邦夫(天野博物館友の会事務局長)
 伊中義明(朝日プリンテック社長)：会計監査

2-4 鹿児島での開催

(1) 展示の概要

鹿児島では、2017年9月9日～10月1日に、放送大学鹿児島学習センターと(公益財団法人)鹿児島県国際交流協会の主催による「マチュピチュに魅せられた日本人と古代アンデス文明」展を「かごしま県民交流

センター」6階ギャラリーで開催した。これは、放送大学鹿児島学習センター所長(当時)菅沼俊彦先生のご尽力により開催に漕ぎつけたものであり、「ギャラリー」のリニューアル後の実質的な「こけらおとし」となった。菅沼先生とその関係者、また放送大学の鹿児島学習センターの事務の方々、ボランティアの方々との協力で、3日間で実施した準備作業がなんとか間にあった。

期間中に、講演会を4回実施し、来場者は約1000名となった。ギャラリー・トークを6回実施したが、とくに、BIZEN中南米美術館の森下館長によるギャラリー・トークでは、横浜と同様に、笛付き土偶・土器の実演が人気を博した。展示会と、会期中のギャラリー・トークなどは、朝日新聞、毎日新聞、南日本新聞などで紹介された。

企画の要領は以下の通りである。

 「マチュピチュに魅せられた日本人と古代アンデス文明」展

〔展示会趣旨〕(省略)

- 〔展示品〕
 ○古代アンデス文明出土品など：土器、織物、黄金装身具レプリカ
 ○アンデスの現代文化を表す民具など
 ○天野氏、野口氏遺品
 ○マチュピチュ/サクサイワマン砦 巨大写真(各 2.7m×7m)

〔開催日〕 2017年9月9日(土)～10月1日(日) 計22日間
 〔入場料〕 一般700円(事前登録者500円)、中高生300円、小学生以下無料

〔展示会場〕 かごしま県民交流センター、6階ギャラリー(鹿児島市山下町14-50 市バス・市電：水族館口)

〔主催〕 放送大学鹿児島学習センター、(公益財団法人)鹿児島県国際交流協会

〔共催〕 天野博物館友の会、日本マチュピチュ協会、BIZEN中南米美術館

〔後援〕 在日ペルー共和国大使館、鹿児島市教育委員会、鹿児島県教育委員会、南日本新聞社、南日本放送、NHK鹿児島放送局

〔顧問〕 大貫良夫(東京大学名誉教授、野外民族博物館リトルワールド館長)

〔実行委員長〕 菅沼俊彦(放送大学鹿児島学習センター所長)

〔実行委員会副委員長〕 稲村哲也(放送大学教授)

〔実行委員会委員〕

尾塩尚(天野博物館友の会副会長、元TVプロデューサー)

森下矢須之(BIZEN中南米美術館館長)

野内セサル良郎(日本マチュピチュ協会会長)

〔事務局・問い合わせ先〕

放送大学鹿児島学習センター 山脇香織、菅沼俊彦

(2) 「アンデス展」の設営と準備作業

展示を実施するためには、全体のコンセプトを決めた上で、展示会場の大きさや特徴、また、展示ケースの準備などを勘案したうえで、ストーリーを考える。そして、(自由動線も含め)動線にそって、各展示コ

コーナーの配置を設定する。かごしま県民交流センターの6階のギャラリーは、約600㎡のかなり広い、立派な展示場である。壁面の一部に長い壁付ケースがある。その活用と独立ケースの配置を、展示のストーリーを想定して、決めていく。図1は、展示場の配置図である。

この展示会の一連の準備作業をビデオ収録し、オンライン科目「博物館資料論」で活用した。以下は、その準備作業の内容である。

①展示会場の設営：ケースの設置など

- ・まず、展示会場のゾーニングに沿って、パーティションを立てた（写真7）。
- ・展示ケースを運びこんで、プランにそって設置。壁面に、長い壁つき展示スペースがあるので、そこに白い展示台を等間隔に並べ、そこに20の土器を展示することにした（写真8）。
- ・独立型（行燈型）の亚克力・ケースの搬入。独立型ケースは、壁面ケースと違って、四方や上からも見られるのが利点である。ここでは、戦士などの絵が描かれた土器と戦士人面土器（共にモチェ文化の土器）を並置するなど、モチーフ・造形に関連性がある、特徴的な土器を展示することにした。
- ・民族資料を展示するスペースとして、壁面に沿ってオープンな展示台を設置。民族資料は、古代の土器などと比べれば、日常生活用具などが中心で、触られても壊れる心配が少ないこともあり、露出展示とした。このあと、梱包を解いた民族資料を床面に広げ、展示作業を行った（写真9）。壁面に、展示

物を吊るすレールがあるので、それも利用した。

- ・広い展示スペースでは、壁面だけに展示をするのでは見栄えという点で物足りない。そこで中央に大きな展示台の「島」を置くことにした。それによ



写真7 パーティションの設置



写真8 壁付ケースに展示台を設置

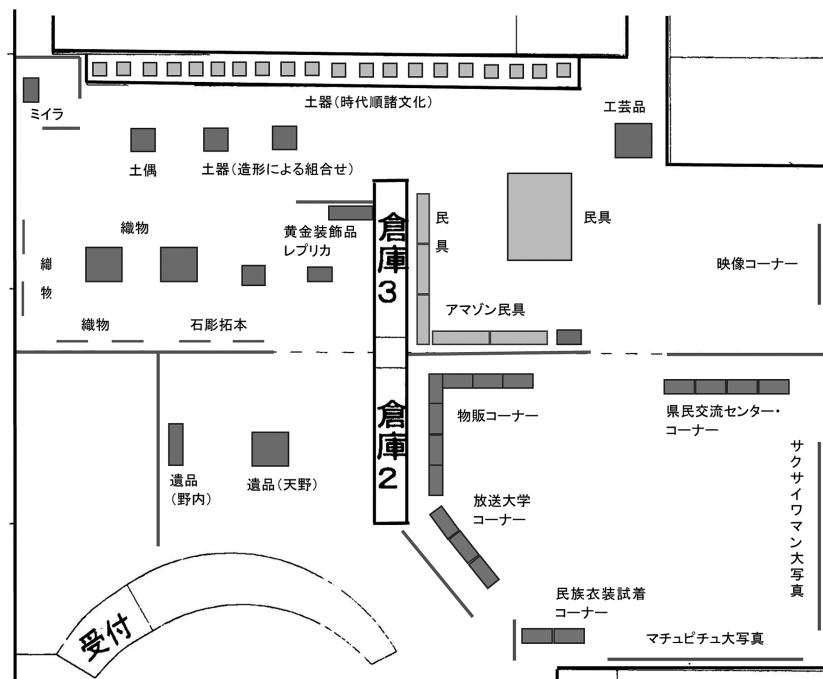


図1 鹿児島での展示の配置図

て、より多くの資料を展示することができ、展示に変化をつけ、印象的な展示にすることができる。大きな展示台だけでは変化に乏しいので、展示台の上に台をおき、さらに立体感を出すために、その真ん中に市販のパイプ製展示棚を倒して利用することにした(写真10)。

②マチュピチュ巨大写真の壁面設置

- ・壁面の上のレールにフックをつけて、その間隔を調整し、ここに巨大写真を取り付ける。その準備段階として、フックにつるすワイヤの長さを調節する。放送大学のボランティアに、協力して作業をしていた(写真11)。



写真9 壁側に露出展示台を設置



写真10 中央に露出展示台のシマを設置



写真11 ワイヤの長さ調節

- ・巨大写真を吊るすためにワイヤのフックにかける。脚立の上の人、写真のロールを移動する人、ワイヤを渡す人などの連携作業である(写真12)。

③織物額の設置

- ・壁面に、額に入った大きな古代の織布を設置。壁面の上のレールのフックからワイヤで吊るす(写真13)。左右のバランスをとるため、ワイヤの長さの調整が重要である。

④古代土器のテグスでの固定

- ・土器をダンボール箱から取り出して、薄紙のこよりの紐をほどいて、梱包を丁寧解く(写真14)。写



写真12 マチュピチュ巨大写真の設置



写真13 織物の額を設置

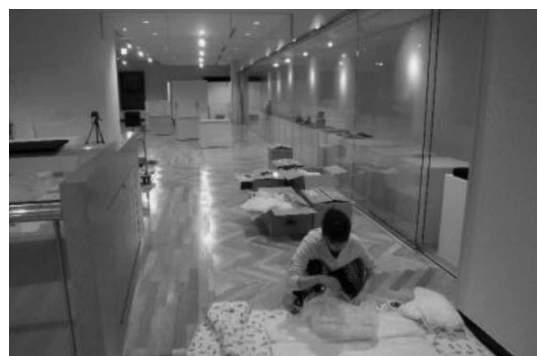


写真14 土器の梱包を解く

真の取り出した土器は、古代アンデスのチャビン時代の土器で、いまから約3000年前のものである。

- ・梱包材は、そのままの状態ダンボール箱に戻しておく、展示終了後に梱包するときに便利である。以後の一連の展示作業は、牧野由佳氏（知多市歴史民俗博物館等の学芸員を経て、現在、総合研究大学院大学博士課程）が担当した。
- ・展示台の上に置いた、ビロードで覆った板に、かなづちでピンを打ち込む（写真15）。ピンを打ち込む位置は、この作業の前に、寸法を測ってマスキング・テープでしめしている。
- ・テグスにやわらかいチューブを通す。チューブは土器に直接あたる部分を保護するためである。
- ・土器が、地震などの揺れによって動かないように、さきほど打ち込んだピンにテグスで固定（写真16）。チューブを土器に接する部分に合わせ、2本のテグスを土器にまわして、四方に打ち込んだピンに固定する。
- ・展示台に直接ピンを打ち込むことができなかったため、市販の板とビロード布で、薄い敷板を手作りし（写真17）、それにピンで止めるという工夫をした。
- ・行燈型（独立型）ケースに、特徴的なモチーフをもつ関連性のある器を展示した（巻末カラー⑥）。

⑤黄金装飾品展示

- ・東大アンデス調査団から借用した黄金装飾品レプリカの梱包を解き、ガラスケースに展示した（巻末カラー⑦）。また、行燈型ケースに、黄金の冠とその両側に耳飾りを展示した。大きな耳飾りは、古代アンデスで身分の高い人が身につけたものである。ガラスケースの背面のボードに、関連の発掘、黄金装飾品の発掘状況を示す解説版を掲示した（巻末カラー⑧～⑨）。

⑥民族資料の展示

- ・壁面に設置した露出展示台の上に民族資料を設置した。壁面とレールのワイヤ・フックを利用して楽器



写真17 展示の敷き板の手作り



写真15 展示板の四隅にピンを打ち込む



写真18 露出展示と壁面の展示



写真16 テグスで土器をとめる



写真19 中央のシマに衣装等の展示

などを展示した（写真18）。

- ・中央の大きな展示台の「島」の上には、市販のスチール棚を倒して活用し、民族衣装や織物などを展示した（写真19）。

⑦遺品の展示

- ・天野芳太郎の遺品の展示：天野が遺跡で採取した織物の端切れ、著書、自筆の手紙などを展示し、壁面に天野の業績を掲示した（写真20）。天野は、ペルーで事業を興したあと、リマ市に考古学博物館を設立し、そこには皇室をはじめ、多くの日本人が訪れた。



写真 20 天野芳太郎の遺品



写真 21 野内与吉の遺品

- ・野内与吉の遺品の展示：手作りの工具などを展示した（写真21）。野内与吉は、クスコとマチュピチュの間の鉄道建設などに従事したあと、マチュピチュ村の村長になった。壁面に、野内与吉の生涯に関する解説を掲示した。

⑧照明、看板設置

- ・展示が完成したあとの重要な作業が照明である。天井のレールに照明を設置し、展示品が見やすい場所に固定する。額入りの織物などの場合は、ライトの光の反射がまぶしくないように工夫する。

以上のような多岐にわたる作業によって展示が完成した（写真22）。オープニングに地域の中学生在が招待され、テープ・カットが行われた（写真23）。そのあと、筆者がギャラリー・トークを行った。

また、最後にマチュピチュ巨大写真のある広いスペースを設け、そこで来場者が民族衣装を着て写真撮影ができるようにした（写真24）。そこは、来場者がゆっくりくつろぎながら、買い物も楽しめるスペースである。また、ボランティアが販売をしたり、民族衣装の着付けを手伝ったりしながら、自然にコミュニケーションが盛り上がる場である。また、そこは、ギャラリー・トークの会場としても利用できるスペースとした（写真25）。



写真 23 オープニング



写真 22 展示場の完成



写真 24 民族衣装で記念撮影



写真25 民族衣装スペースをギャラリー・トークに活用（宮崎泰氏講演会）

2-5 大分での開催

(1) 展示の概要

大分では、放送大学大分学習センター、大分県立歴史博物館、宇佐市の共同主催により、2018年7月21日から9月9日まで大分県立歴史博物館（宇佐市）で「マチュピチュ・古代アンデス文明と日本人」展を開催した。

大分県立歴史博物館は、宇佐市の川部・高森古墳群の中にあり、「宇佐風土記の丘」として史跡指定を受けている。宇佐市は、国東半島の付け根に位置しているが、宇佐神宮は八幡信仰の発祥の地とされている。近くには磨崖仏があり、国東半島全体に神仏集合の信仰が盛んである。また、宇佐市西椎屋地区の「秋葉様（火伏せの神）」と呼ばれる円錐形の小山は「宇佐のマチュピチュ」と呼ばれる特殊な景観を有している。景観の類似に加え、「アーチ式石橋」などの石の文化、磨崖仏などの仏教遺跡、古い神仏習合の信仰などを含め、本場のマチュピチュ遺跡との共通性があげられ、「宇佐のマチュピチュ」は地域興しのアイテムのひとつとなっている。

本展示は、放送大学大分学習センターの活動が、地方自治体（宇佐市）の国際交流企画と、県立の博物館の企画展示とを結びつけて実現した。放送大学と自治体の画期的な共同事業という位置づけとなったのである。その背景には、大分学習センターの前田明所長



写真26 国際交流シンポジウム（大分市と宇佐市で開催）

（当時）の熱意と働きかけ、大分県立歴史博物館の橋本靖彦前館長及び小柳和宏館長（当時）の理解と積極性、宇佐市の是永修治市長の肝いりがあった。展示会に先立って、放送大学の国際交流委員会の企画として国際シンポジウムを開催した（写真26）。その際に文化紹介として博物館ホールの磨崖仏（レプリカ）でパロミノ氏にフォルクローレ（アンデス民族音楽）を演奏してもらった（巻末カラー⑩）。

以下は企画全体の概要を表す企画書の抜粋である。

「石と水と信仰がつなぐマチュピチュの世界in大分宇佐」実行委員会

1. 名称：国際交流事業「石と水と信仰がつなぐマチュピチュの世界in大分宇佐」
2. 期間：平成30年度 7月21日（土）～9月9日（日）
3. 主催：大分県立歴史博物館、宇佐市、放送大学大分学習センター
4. 共催：日本マチュピチュ協会、別府大学
5. 協力：BIZEN中南米美術館、東京大学総合研究博物館、野外民族博物館リトルワールドなど
6. 内容

★大分県立歴史博物館における展示会及び公開講演会

- 企画展「マチュピチュ・古代アンデス文明と日本人」の開催 古代アンデス文明出土品、天野芳太郎氏、野内与吉氏遺品、アンデス現代文化関係民具、マチュピチュ巨大写真など
- 公開講演会 上記展示会に関連した講演会の開催（一部県立図書館で開催）
（主な講師）
大貫良夫（東京大学名誉教授、野外民族博物館リトルワールド館長）
森下矢須之（BIZEN中南米美術館長）
野内セサル良郎（日本マチュピチュ協会会長）
稲村哲也（放送大学教授）

★宇佐市における関連事業

- 「天空の郷・音楽フェスタ」
- 「ペルー・宇佐食育交流フェスタ」
- 「マチュピチュの郷フットパス」

7. 目的

平成30年度に大分県立歴史博物館で開催する企画展「マチュピチュ・古代アンデス文明と日本人」及び宇佐市西椎屋地区における地域活性化事業と、放送大学大分学習センターの関連事業を連結した「石と水と信仰がつなぐマチュピチュの世界in大分宇佐」を実施することにより、第一に広く大分県民にマチュピチュと古代アンデス文明を紹介する。第二に、今や世界的に最も大きな関心が寄せられるマチュピチュと古代文明の遺跡と日本人が戦前から関与してきた歴史を学びなおし、ペルー共和国及びその文化と歴史に対して敬意と親しみの気持ちを醸成する。それらと共に、「石と水と信仰がつなぐ世界」に通ずるものが宇佐地域に存することを再認識し、郷土愛と誇りを高めていきたい。

8. 本事業開催企画の経緯

- (1) 放送大学大分学習センター（以下、学習センター）ではかねてより地域と連携した生涯学習教育等の推進に努めてきたところであり、宇佐市には学習センターのサテライトスペースが設置されている。

- (2) 放送大学でも地域における生涯学習・教育をはじめとした地域振興の一環として、稲村哲也教授（文化人類学専門）が「世界歴史遺産『マチュピチュ遺跡』・古代アンデス文明をテーマとした展示会」（以下、「展示会」）を開催してきた。（開催地は、秋田・福島・横浜・鹿児島。詳細は別記）。また、展示会の開催と連携して、稲村教授・野内日本マチュピチュ協会会長（マチュピチュ村初代村長の令孫）を講師とするマチュピチュ講演会（以下、「講演会」）を開催してきた。
- (3) 平成28年度に熊本県で開催予定の講演会が同年4月の熊本・大分地震のため開催が不能となった。これを機に、大分学習センター長前田大分大学名誉教授及び石川大分大学理事（元大分県副知事）が、「宇佐のマチュピチュ」を有する大分県宇佐市での開催を企画し、稲村教授の推奨も得て、大分県立歴史博物館に講演会開催を要請した。
- (4) 平成29年1月に大分県立歴史博物館で講演会を開催し（資料2）、その折、稲村教授・野内会長を宇佐市院内町西椎屋「宇佐のマチュピチュ」に宇佐神宮と併せて案内したところ、野内氏が西椎屋現地とマチュピチュ遺跡との間に類似性があると絶賛し「展示会」への協力について申し入れを受けた。類似性として、現地の外形的景観のみならず、背景となる宗教的文化・川・石段等の「地勢」の特徴があげられた。
- (5) なお、大分県立歴史博物館で講演会の際、是永宇佐市長が稲村教授・野内会長と面談し「マチュピチュ」をテーマとする連携に合意した。後日、大分県立歴史博物館長が宇佐市長に前記の会長申し入れを報告したところ、博物館を会場とする展示会開催への支援を表明した。

9. 本事業運営組織（実行委員会等）

「石と水と信仰がつなぐマチュピチュの世界in大分宇佐」実行委員会名簿

実行委員長	前田 明	放送大学大分学習センター 所長	
副実行委員長	是永 修治	宇佐市 市長	
顧問	小柳 和宏	大分県立歴史博物館 館長	
	大貫 良夫	東京大学名誉教授・野外民族博物館リトルワールド館長	
事務局長	稲村 哲也	放送大学 教授	
	野内セサル良郎	日本マチュピチュ協会 会長	
	森下矢須之	BIBEN中南米美術館 館長	
監事	尾塩 尚	天野博物館友の会	
	浜田 健次	放送大学大分学習センター 広報主幹	
委員	橋本 靖彦	おおいた国際交流プラザ 次長	
宇佐市	野内セサル良郎	日本マチュピチュ協会 会長	
	佐藤良二郎	社会教育課長	
	井上 涼治	文化・スポーツ振興課長 (地元代表委員を兼ねる)	
	末宗 勇治	観光まちづくり課長	
	野村 庄司	院内支所・産業建設課長	
	小野 辰浩	観光協会事務局長	
	眞砂 文雄	両院商工会事務局長	
	歴史博物館	菅野 剛宏	学芸調査課長
		畑中 伸一	総務課長
		原田 昭一	企画普及課長
別府大学	稗田 優生	学芸員	
	佐藤 孝裕	別府大学教授	

東海大学 大平 秀一 東海大学教授
放送大学 平野 純治 大分学習センター事務長

大分県立歴史博物館の企画展示室はかなり広く、壁つき展示ケースのスペースも大きいため、これまでの展示会のなかでも、規模も期間も最大のものとなった。BIZEN中南米美術館（森下矢須之館長）から、約100点にのぼる土器、織物等の資料を貸し出していた。とくに、エクアドルのユニークな土器や土偶が多数加えられた。また、野外民族博物館リトルワールド（大貫良夫館長）から、現代に伝わる伝統文化に関する民族資料約100点を借用し展示した。さらに、東大アンデス調査団によって発掘されたコトシユ遺跡の「交叉した手」のレプリカ、クントゥル・ワシ遺跡から出土した黄金の装飾品のレプリカ、また、野内与吉氏の遺品である手作りの工具、天野芳太郎氏の遺品である自筆手紙、古代裂なども展示した。ここでは、各展示コーナーの内容を写真とともに紹介する。

(2) 展示コーナーの構成と展示品の概要

<導入>

- ①特別展示場の入り口：マチュピチュ写真が入ったカンバン
- ②導入展示コーナー：大きな額に入った古代織布3点の印象的展示（写真27）。

<A マチュピチュの出会い>

- ①野内与吉の生涯：鉄道関連の手作りの道具などの遺品を展示（写真28）。
- ②天野芳太郎の生涯：天野が遺跡で採取した古代裂、自筆の手紙、著書などを展示（写真29）。

<B 東京大学による発掘>

行灯型ケースで金の冠を展示したほか、独立の長方形ケースで金製装飾品レプリカ（計6点）、「交叉した手」のレリーフのレプリカなどを展示した（写真30）。「交叉した手」は、1960年代に東大アンデス調査団が発掘したペルー最古（当時）の神殿の祭壇に付随していたレリーフである。黄金の装飾品は、1990年代にクントゥル・ワシ遺跡の墓から人骨と共に発掘されたも



写真 27 導入展示として印象的な織の展示



写真28 野内与吉の遺品コーナー



写真31 ペルーの土器 時代順



写真29 天野芳太郎の遺品コーナー



写真32 ミイラと死生観



写真30 金の冠のレプリカなどの展示



写真33 織物の展示（作業中の石川優生学芸員）

のである。日本で最初に展示会が催された際に、出土品と全く同じ金の組成でレプリカが制作された。本物は現地のクントゥル・ワシ博物館で展示され、レプリカを東京大学総合博物館が所蔵している。

<C 古代アンデスの多様な文化>

①多様な土器（ペルー）（写真31）：長い壁付きの展示ケースに、古代アンデス文明の中心であったペルーの多彩な諸文化の計40点の土器を展示した。基本的に紀元前1800年に遡る「形成期」（チャビン文化）、「地方文化期」（モチエ文化、ナスカ文化、他）、「中期ホライズン」（ワリ文化）、「地方国家期」（チムー文化、チャンカイ文化、他）、「後期ホライズン」（インカ文明）の土器を展示し、通時的変遷と共に、

古代アンデス文明の多様性を紹介した。

- ②ミイラと死生観（写真32）：古代アンデス文明の死生観を示すため、壁付きの展示ケース（小型）に、チャンカイ文化のミイラ頭骨2点を展示した。同じコーナーに、神の像を伴う土器2点、また、神々に捧げるための酒の木杯「ケロ」2点も展示した。
- ③繊細な織物：チャンカイ文化を中心とする織物20点を展示し、多様なモチーフと多様な織・染色が創り出すアンデスの繊細な織の文化を紹介した（写真33）。
- ④鳥のモチーフ、戦士のモチーフ、動物のモチーフ：小型の壁付ケースに、独特のモチーフをもつ土器のコーナーを設けて、アンデスの土器のもつ多様な造形等の面白さを紹介した。

⑤ユニークなエクアドルの文化：紀元前3000年に遡るエクアドルの多彩な土偶、土器など38点を展示し、ペルーとは異なる北部アンデス・エクアドル地域のユニークな古代文明の特色の一端を紹介した（写真34）。

<D アンデス先住民族の文化>

①アンデスの生業（農耕・牧畜）（写真35）：踏み鋤（チャキ・タクリヤ）などの農具、投石縄（オンダ）などの牧畜に係る民族資料を展示し、現代に生きる先住民の生業活動を紹介した。

②アンデスの織と衣装（写真36）：織機、衣装等約30点を展示し、現代の先住民社会に伝えられる織の技術と民族衣装を紹介した。

③アンデスの音楽と工芸（写真37）：ケーナ、サンボニーヤなどの多様な伝統的楽器、細かい絵画を伴うヒョウタン容器、ナシミアント（キリストの誕生の場面）を伴う十字架の工芸品等約20点を展示し、現在の民俗文化の一端を紹介した。

④アマゾンの文化（写真38）：弓矢、織物、装身具など約30点を展示した。

大分での展示会は、それまでの4回の展示会とは大きく異なる点があった。それは、大分県立歴史博物館の広く立派な企画展示場を会場とし、学芸員さんたちと共同して展示ができ、展示設営に専門の業者が携わったことである（写真39～40）。そのため展示のクオリティは大いに高まった。同博物館とは、展示会の共



写真 34 エクアドルの多様な土器



写真 37 楽器や信仰の展示



写真 35 民族展示：左は生業



写真 38 アマゾン文化の展示コーナー



写真 36 民族衣装展示コーナー



写真 39 日通の専門家が梱包し学芸員がチェック



写真 40 梱包箱は展示品に合わせて作成

同開催のほか、「博物館資料保存論」等の科目制作のロケ等でもたいへんお世話になった。一方で、同博物館が後に開催したモンゴルをテーマとする企画展で協力した。このような形で放送大学と博物館の強い連携の絆ははぐまれた。

また、展示会の前にご夫妻でマチュピチュ遺跡を訪問した前田明所長（当時）の強い熱意と、浜田健二事務局長をはじめとする事務スタッフの周到な準備によって、また学生ボランティアの積極的な協力によって、展示設営と運営を極めて順調に進めることができた。まさしく、それまでの展示会の集大成となったのである（巻末カラー⑩～⑭）。

3 「放送大学博物館」設立構想に向けた基礎的研究と可能性

3-1 大学博物館とは

大学の博物館が、学術標本の収集・保管のためだけでなく、明確に研究・教育とその公開・発信の機能をもつ機関として確立される契機となったのは、1996年の学術審議会学術情報資料分科会による「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について（報告）—学術標本の収集、保存・活用体制の在り方について」の発表である。まず、旧帝大で「総合博物館化」が推進され、他の大学でも大学博物館の設立・充実が図られてきた。このように、日本で大学の博物館が重視されるようになったのは近年のことだが、今では重要な位置を占め、大学にとっても社会にとっても大きな役割を果たしている（稲村2016b）。大学内においては、学術標本などの保存・整理と継続的な利用に資するだけでなく、専門分野間を繋ぐ研究と教育の拠点として重要である。また、研究のプロセスと成果を地域に広く公開することは、知的財産を社会全体で共有し、とくに次世代に多様な知的関心を喚起するために有効である。

放送大学の博物館設立のメリットは、一般の大学以上に大きいと言える。博物館に実物資料と情報を集積・保管し、教育、番組制作に活かし、地域の博物館・諸機関との連携により、大学の総合力を強化することができる。さらに、近藤智嗣教授が構想するデジ

タル・アーカイブとの連動により、映像データ等の集積・保存・活用を可能とすることができる。

3-2 学内に豊富に点在する資料とその整理

2019年度、教育学習戦略研究所による課題研究「放送大学博物館構想・『博物館実習』構想のための基礎的研究」を実施した。まずは、学内を巡回し、博物館の収蔵資料となりうるモノがあるかどうか確認した。その結果、さまざまな場所に、放送関連機材、理系の実験機材など、貴重な「お宝」があることがわかった。また、放送大学の地上波の廃止に伴い、関連の機材が廃棄処分になることが決まったが、來生新学長と近藤智嗣教授のご尽力により、パラボラ・アンテナなどの一部の機材がレスキューされた。結局、学内には「大学博物館」の収蔵・展示にふさわしい多くの資料が散在していることが明らかとなった。

次に、それらのモノのリスト作成と資料カードの形式の検討を進めてきた。博物館資料にとっては、それに伴う諸情報が重要であり、資料カードがその基本となる。カードの形式は、博物館の資料の性格によって記載内容が異なる。たとえば、美術館と科学博物館では大きな違いがある。放送大学の資料は放送機材などが主要な部分を占めるため、それに合致した収蔵資料カードの形式について検討した。今後は、民族資料なども含めた、カードの形式の改良が必要である。

3-3 展示スペースの検討

近藤智嗣教授の示唆と基礎的調査の結果、学内のプライム室に基本的な展示設備があり、一定の資材を設営するだけで、また、学内の既存の資料を展示するだけで博物館開設が可能であることが明らかとなった。大学博物館は現行の博物館法（1951年施行）の管轄外にあるため、その設備や運営は大学独自の裁量に任されている。

そこで、筆者は、放送大学博物館（仮）設立を想定し、その基本コンセプト、展示基本設計（図2）、展示室・学習室のゾーニング（図3）などを検討した。展示の基本構想としては、「A放送大学と遠隔教育の歴史」と「B大学における研究（(B1 理系の研究、B2 文系の研究）」を骨子とした常設展示場を中心とし、



図 2 放送大学博物館のパース（作成：高山敦）

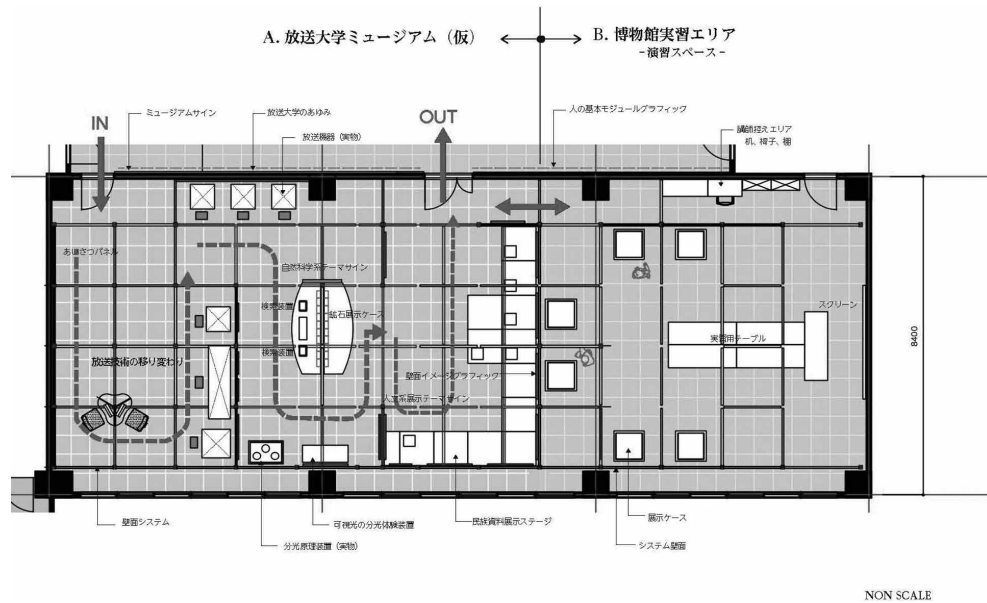


図3 放送大学博物館のゾーニング(例)(作成:高山敦)

企画展示・実習室と実習用講義室を設けるといものである。常設展示場に展示する資料としては、A:遠隔教育コンテンツ制作機材、放送機材など、B1:実験機材、鉱石・化石標本など、B2:民族資料などが候補となる。博物館実習の開設については後述するが、実習に利用する資料も、すでに学内の必要最小限のものは存在している。

3-4 アウトリーチ展示会開催の意義

第2章で報告した放送大学主催の展示会は、放送大学の広報、イメージアップ、学生募集、教育の活性化等に関して、さまざまな効果があった。大分学習センターがまとめた報告書で、鴛海和彦さん(名誉学生)は、マチュピチュ記念写真のボランティアの感想として「マチュピチュの大きな写真の前で民族衣装を着て多くの方が写真を撮っていました。一番印象に残っているのは、祖父とお孫さんの写真を撮ってあげた時の2人の嬉しそうな表情です。今も脳裏に残っています。何回も2人からお礼を言われました。」と記している。見るだけの展示会でなく、楽しく参加・交流ができる展示会であり、放送大学ボランティアと来場者のコミュニケーションが大いに盛り上がったことがわかる。一方で、同氏は次のようなエピソードも紹介している。「『放送大学ってアナウンサーになるための大学ですか』と数人から言われショックを受けました。このショックに負けず、放送大学のPRに努めた結果、募集要項30冊がすべて無くなってしまいました」。

放送大学にとっての展示会の効果は以下のようにまとめることができるであろう。

①広報の効果

- ・会期中に数千人が来場しており、その間の多彩なイベントも可能であり、単発の講演会等と比較して

も、その効果は大きかった。

- ・展覧会のテーマの意義と話題性により、また会期中に開催される講演会、ギャラリー・トーク、音楽会等のイベントにより、大きな新聞記事が何度も掲載され、放送大学の知名度向上に貢献した。

②学生募集の効果

- ・展示会の来館者はもともと教養に関心のある人が多く、来館者の多くにパンフレットを配布することができた。
- ・学生ボランティアの尽力により、会期中、関心のある来場者に直接、説得力をもって放送大学の魅力を伝えることができた。来場者の一部は、入学の意志を伝え、募集要項を持ち帰った。

③教育の効果

- ・ボランティア活動により、学生間の絆や放送大学学生としての自覚が強まると共に、学習意欲の活性化を大いに感じる事ができた。

④連携の効果

- ・地域の博物館(及び、その他の諸機関)との連携と信頼関係を確立し、放送大学の教育、発信などの総合力の強化と多様な活動展開のベースを作ることができた。

3-5 博物館との連携と遠隔教育への活用

遠隔教育は、通学制の教育と比較すると、遠隔教育による学習は、実践性や社会性に欠ける部分があり、学習者が孤独に陥りがちである。実践性や社会性の確保が遠隔教育にとって大きな課題であり、その解決を必要としている。筆者は、アウトリーチ展示会の活動のなかで、遠隔教育における博物館との連携、活用に

大きな可能性を見出した。

これまで、学習センターでの面接授業、また、サークル活動などの課外活動は、遠隔教育における対面コミュニケーションや実践的な活動として、孤独に陥りがちな遠隔教育のマイナスを補ってきた。ただし、それらは、遠隔教育を補完する方策である。博物館との連携による科目制作は、遠隔教育そのものに「実物による学習」や、(博物館に出向くことによる)「社会活動の促進」を組み込むことを可能とする。博物館との連携はより積極的な方策といえよう。

そこで、筆者は、2019年にオンライン科目「博物館で学ぶ文化人類学の基礎」を制作し、科目の学習に実際の博物館での見学を促すシステムを組み込んだ。その具体的な方式は、科目の内容と関連する博物館の具体的な展示を紹介し、それに基づいて地域の博物館等を見学することなどである。予想通り、この科目へのニーズは高く、2020年度の受講生の総数は1500名以上にのぼった。

博物館の見学を契機に、博物館が実施している「友の会」などを活用して、放送大学の学生が主体的に、実践的な場に参加する道もひろくことができる。これは、地域連携を推進している博物館側からも大いに歓迎されることである。一方で、博物館と連携することで、教養志向が高い「友の会」のメンバーに対して、より積極的に放送大学を広報することも可能となるのである。

3-6 放送大学博物館設立の可能性と学芸員資格授与

すでに述べたように、大学博物館は現行博物館法の枠外にあり、もっぱら大学独自の裁量による設立・運営が可能である。そのため、公立博物館のような設備・人員・運営等の縛りがなく、経常経費も大学の裁量による(経費が赤字となる事態を避けることができる)。さらに、放送大学の場合、既存スペース(PRIME室)を活用することにより、ハコモノの建築費はいっさい不要である。

現下の感染症流行の状況では、本格的展示工事は現実的には不可能である。しかしながら、市販の展示ボード等を使用することで、工事を伴わずに、展示を実施することは十分可能である。筆者は、これまで、各地でアウトリーチの展示会を開催し、「手作り博物館」のノウハウを蓄積してきた。そこで、2020年度に承認された学習教育戦略企画室のプロジェクト「大学博物館設立の意義・方法・課題に関する実践的研究」により、博物館のモデル展示を実施することとした。

本学の場合、「学芸員資格授与」の道が開けるメリットも大きい。現状においては、「博物館概論」など

の博物館関連科目(学芸員資格のための必修科目)を8科目(実習を除く全科目)開講していながら、「博物館実習」科目がないため学芸員資格を授与できない。しかし、博物館設立により実習体制を整備でき、資格を直接授与できるようになる。博物館科目の受講者は、科目によって異なるが、それぞれ年間400~1500名程度であるため、毎年、必修8科目習得者(博物館実習受講資格者)が数100名ずつ増加していると推算される。本学で学芸員科目を開始してから10数年が経過しており、必修8科目習得者の数は、数千人に達していると思われる。現状で、協定大学で「博物館実習」を受けられる学生は毎年数10名に限られ、まったく需要を満たしていない。学生からの不満もあり、放送大学が直接に資格を授与することは、もはや大学の責任として喫緊の課題である。また、課題を解決することにより、受講生の上積みが期待できる。

博物館実習は、「学内実習」(2単位:実務実習・見学実習・事前事後指導:60~90時間)および「館園実習」(1単位:30~45時間)で構成されるが、当初は以下の方式が想定される。

館園実習は学外で行う方式:

①「学内実習」:放送大学で「手作りの博物館」および実習施設を整備することで、「実務実習」および「事前事後指導」が可能となる。「見学実習」は、近隣の博物館美術館等で実施する。なお、「見学実習」は学習センターでも(近隣の博物館の見学)実施が可能である。

②「館園実習」は学外の諸博物館に依頼する。その場合、「実習日誌・成績表」を放送大学が用意し、実習先で実習担当学芸員に記入していただく。放送大学ではその「実習日誌・成績表」に基づいて独自に成績評価・単位授与を行う。実習先は、放送大学本部近隣だけでなく、学生が居住する地域などでも可能であり、学生が個別に依頼することも可能である⁴⁾。

放送大学においては、まず、上記の方式で博物館実施・学芸員資格授与を開設し、それに続いて、文科省の指導に基づき、放送大学博物館の運営方法を整備することにより、費用対効果を勘案しつつ、「館園実習」も学内で実施する方向で検討することが望ましいと思われる。

3-7 実習の事例

放送大学博物館が設立されれば、少なくともそこで学内実習は可能となり、博物館学芸員の資格を授与

⁴⁾ これは、筆者が前職・愛知県立大学で行っていた博物館実習実施・学芸員資格授与の方式と同じである。愛知県立大学では、博物館実習室を整備し、そこで学内実習を実施し、館園実習は学外で実施していた。なお、県内の多くの私立大学等も同様の方式をとっていた。その場合、博物館の実習受け入れ人数に制限があるため、実習先の確保がネックとなる。愛知県立大学の場合、筆者が設立に携わった(現在も客員研究員である)野原民族博物館リトルワールドで、多くの実習生を受け入れもらっていた。博物館内での指導(館園実習)も筆者自身が実施していた。また、野外博物館の性格上、スペース的に、多くの実習生を受け入れられる体制にあった。

することができる。では、学内実習はどのように行うのか。以下は、中心をなすワークショップのひとつのモデルである。

(1) 実習（ワークショップ）の準備

まず、展示台、解説板掲示用パーティション等を用意する。実習者の総数を30名とした場合、5グループ（各グループ6名ほど）にミニ展示スペースを割り当て、企画・展示・評価を実施する。展示の企画のために、展示資料、選択できるテーマ、資料にかかわるデータをを用意する。展示の設営に際しては、テグス留め等のある程度の小道具も用意する。解説板の制作については、プリンター、ハレパネ、カッター・カッター板等の器材を用意する。

(2) 実習（ワークショップ）の手順

①企画

- ・いくつかのテーマを提示し、希望者を募って、グループ分けを行い、リーダーを決める。
- ・各グループに分かれ、展示の具体的なテーマ（タイトル）、全体のコンセプト等について、話し合いを行う：大きな用紙、ポストイット、サインペンなどを用意し、各参加者の意見を出して議論し、展示のコンセプトについてまとめる。
- ・10点程度の展示物を選ぶ。
- ・分担を決め、各展示物の解説、全体のコンセプト、Q&A、イラストなど、展示解説について相談し、解説文を作成する。
- ・ミニ展示の展示台等の配置、展示物の配置を相談・検討して決め、簡単な展示の完成図を描く。
- ・各グループが展示企画を発表する。

②展示作業（実習補佐がグループを回り、必要に応じて手伝う）

- ・展示解説をプリントアウトし、ハレパネに貼り、解説パネルを制作する。
- ・ミニ展示スペースの配置を決める。
- ・展示物を設置する。
- ・解説板などを設置する。
- ・展示を全員が見学し評価票に記入する。

③評価と修正

- ・受講生の展示評価をふまえ、展示を行ったグループ内で話し合う。
- ・グループ・リーダーが話し合いの結果を発表し、講師と他の受講生による講評を行う。
- ・展示の修正作業を行う。
- ・相互に展示を見学する。
- ・さらに、各グループの展示を全員が見学し、評価票に記入する。
- ・講師が講評を行う。

④展示フォト・アルバム

- ・いくつかのキーワードを提示する。
- ・各参加者が、スマホ等で、気に入った展示物の写真を撮り、それにキーワードに応じた解説を考えて、書く。
- ・何人かが発表する。
- ・グループ毎に「展示フォト・アルバム」をまとめる。
- ・最終的に「展示フォト・アルバム」を完成し、各自に配布する。

(3) 実習の資料とテーマ

放送大学博物館が所蔵すると想定される資料は、放送機材系、自然科学系、および人文系資料である。

以上のような資料を活用することで、以下のようなテーマを想定することができる。

- ①放送機材（カメラ、録画装置・機材、ダビング機材、照明器具、その他）などの資料を使う場合：
 - ・放送大学のこれまで
 - ・放送番組ができるまで
 - ・番組制作の変遷
- ②自然科学関連資料：物理実験器具、生物実験器具（顕微鏡など）、化学実験器具（ガラス器具、その他）、鉱物標本、化石標本などの資料を使う場合：
 - ・科学の楽しさ
 - ・地球の歴史
 - ・化石のなりたち
 - ・生物の進化
- ③民族資料（民族衣装、食器、調理具、土器、工芸品、絵画、仮面、など）を使う場合：
 - ・砂漠の生活
 - ・自然環境と文化
 - ・アフリカの文化
 - ・太平洋地域の文化
 - ・アジアの文化
- ④宗教関連（エチオピア正教、ヒンドゥー教、チベット仏教）の資料を使う場合：
 - ・信仰の多様性
 - ・正教とは
 - ・ヒンドゥー教とは
 - ・チベット仏教とは

4 おわりに：博物館との多様な連携

大分学習センターによる報告書で、「マチュピチュ・古代アンデス文明と日本人」展の開催に全面的に協力していただいた石川優生さんは、次のように感想を述べている。

本展は笑いあり、希望あり、思いで深い展覧会となりました。これまで大分県立歴史博物館の企画展は、宇佐・国東をテーマとした展示や全国規模の巡回展な

ど、さまざまなテーマで展示会が行われてきました。今回の「マチュピチュ・古代アンデス文明と日本人」展は、外国文化がテーマの企画展としては初開催、展示資料ももちろん大分初上陸・初公開、当館が行ってきた約40年間の展示会で「史上初」ばかりでした。実行委員会形式での事業の進め方も初の試みでした。このような貴重な機会に携わることができたこと、心より感謝しています。展示会準備、展示会開催中、展示会撤収作業もすべて含めて、大変楽しかったです。担当学芸員が楽しんでいるかどうか、それは展示会に大きく反映されるように感じています。閉館が近づくにつれ、正直寂しかったです。なんと、例年の企画展の観覧者数よりも多く、大変好評だった展示会でした。

2018年は「平成最後の年」と言われた一年でした。広報活動で出演したラジオ番組で「平成最後の夏は何をしますか?」とパーソナリティに尋ねられたとき、「歴博でマチュピチュな夏を過ごします」と答えました。実際に、人生初のマチュピチュな夏でした。本展で民族衣装を試着して撮影していた観覧者に、「お写真をどうぞ年賀状にお使いください」とお伝えしてありましたら、残暑お見舞いとして送ってくださった方がいらっしやいました。大分県民にとっても、日本から遠く離れたマチュピチュに思いを馳せた夏だったと思います。

展示会開催の協働の過程で、放送大学と博物館の間の強固な連携と信頼関係が生まれた。特に、担当学芸員の石川優生さんには、「博物館資料保存論」等の執筆やロケなどで、たいへんお世話になり、放送大学の教育にも大きく貢献していただいた。一方で、企画展開催は、公立博物館に新風を吹き込むことができた。その一つが、展示場内での民族衣装の無料貸し出しとマチュピチュ巨大写真の前での記念撮影や民芸品販売であり、展示場がボランティアと来館者のコミュニケーションの場となった。それは、従来の公立博物館の企画展とは大きく異なる方式であり、同博物館は以後もその方式を踏襲した。2019年には、同博物館が「カラコルム建都800年 モンゴル展」を開催したが、筆者は、その展示会のために展示場内に設営するモンゴルのゲル⁵⁾と民族衣装を貸与し、その設置にも協力した。ゲルは、企画展来館者の休憩とコミュニケーションの場となった。

本稿では、各地での展示会開催の実践、博物館構想にむけた基礎的調査などから、放送大学と博物館の連携や、「放送大学博物館」(仮)のもつ大きな可能性について論じてきた。放送大学での博物館設立は決して夢物語ではない。放送大学の場合、費用をかけずに設立することが可能で、それによって大きなメリットを

獲得することができる。「手作り博物館」であっても、大学博物館の機能は十分に果たすことが可能である。博物館実習を開設することで教育上も経営上も大きなメリットがある。さらに、博物館という拠点を持つことで、地方の博物館や多様な機関、学習センターと協働し、さまざまなアウトリーチ活動を展開し、多様な連携活動を推進することが可能となる。5地域での展示会開催は、そのことを十分に証明してくれた。

謝辞

本稿の一部は、学習教育戦略研究所の課題研究：2019年度「放送大学博物館構想・『博物館実習』構想のための基礎的研究」、2020年度「大学博物館設立の意義・方法・課題に関する実践的研究」(いずれも代表・稲村哲也)の成果、また、放送大学教育振興会助成金2019年度「博物館活用による遠隔教育の教材および教育システムの開発」、2020年度「博物館と連携した遠隔教育システムの確立に向けた拠点形成」(いずれも代表・稲村哲也)の成果である。記して謝意を表したい。

参考文献

- 天野芳太郎1983『わが囚われの記—第二次世界大戦と中南米移民』中公文庫
- 天野芳太郎生誕100周年記念誌編集委員会1998『天野芳太郎生誕100周年記念誌 南風光砂』天野博物館友の会
- 稲村哲也2016a「古代アンデス文明と日本人—放送大学特別講義と展示会」『放送大学研究年報』33：79-93
- 稲村哲也2016b「大学博物館の展示とその役割—国立大学と私立大学」稲村哲也(編)『博物館展示論』放送大学教育振興会、125-144頁
- 大貫良夫・加藤泰健・関雄二2010『古代アンデス 神殿から始まる文明』朝日新聞出版
- 尾塩尚1984『天界航路—天野芳太郎とその時代』筑摩書房
- 福中又次 1940『インカ帝国と日本人』国際文化研究協会(東京渋谷区原宿)
- 野内セサル良郎・稲村哲也2017「『マチュピチュ村創設者・野内与吉と古代アンデス文明』展の開催」『放送大学研究年報』34：27-37
- 野内セサル良郎・稲村哲也(編)2016『世界遺産マチュピチュに村を創った日本人「野内与吉」物語・古代アンデス文明の魅力』新紀元社
- 浜田健次(編)2019『国際交流事業「石と水と信仰がつなぐマチュピチュの世界in大分宇佐」報告集』放送大学大分学習センター
- 森下精一伝編纂委員会1980『森下精一伝』中央公論事業出版

(2020年11月4日受理)

⁵⁾ゲルは、モンゴル遊牧民の移動式家屋であるが、中国語では「バオ(包)」と呼ばれ、日本人にはその名称のほうがよく知られている。このゲルの設営には、モンゴルのカラコルム博物館の学芸員らが携わった。



カラー⑧ クントゥル・ワシ遺跡における墳墓の発掘



カラー⑪ 展示品を入れた段ボールの開梱（大分）



カラー⑨ クントゥル・ワシ遺跡での金製品の出土



カラー⑫ 完成した展示場（大分）



カラー⑩ パロミノ氏による演奏(大分県立歴史博物館)



カラー⑬ 物販でも学生ボランティアが活躍（大分）



カラー⑭ 前田明先生(大分学習センター所長：当時)ご夫妻